

氏名（本籍）	おき 萩	わら 原	とも 奉	すけ 祐	（茨城県）
学位の種類	医	学	博	士	
学位記番号	博	乙	第	379	号
学位授与年月日	昭	和	62	年	3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当				
審査研究科	医学研究科				
学位論文題目	逆流性食道炎の成因と診断に関する研究 — X線所見と内視鏡所見の対比および食道粘膜糖タンパクの動態 —				
主査	筑波大学教授	医学博士	大	管	俊明
副査	筑波大学教授	医学博士	岩	崎	洋治
副査	筑波大学教授	医学博士	小	形	岳三郎
副査	筑波大学助教授	医学博士	石	川	演美
副査	筑波大学助教授	医学博士	福	富	久之

論 文 の 要 旨

〈目 的〉

食道炎の診断のために、従来よりX線検査と内視鏡検査が施行されているが、X線検査の信頼性はうすい。そこで、食道炎の内視鏡分類のうち、びらん潰瘍型食道炎に対し、X線検査の描写能を内視鏡的診断を基準として比較した。

一方、従来の形態学的診断の他に生化学的情報を加味することにより疾患の本質にせまられると思われ、本研究においてはヒトの食道粘膜の生検組織中の糖タンパク量をヘキソサミン量として測定し、正常群と食道炎群を比較した。さらに、ラット実験食道炎を作成し、その際の食道粘膜ヘキソサミン量を測定した。あわせて、ヒト食道炎の長期経過例の粘膜ヘキソサミン量の変化を測定した。最後に本疾患の成因と診断に関する文献的考察をまとめた。

〈対象および方法〉

対象は、内視鏡分類のうち、びらん潰瘍型食道炎12例で、全例X線検査と内視鏡検査を一週間以内に施行し、内視鏡検査で確認されたびらん潰瘍型食道炎すなわち潰瘍、地図状びらん、線状びらんの三病変に対しX線像の変化について検討した。

ヒトの食管粘膜のヘキソサミン量はコントロール30例，びらん潰瘍型食道炎を伴う食道裂孔ヘルニア6例，食道炎を伴わない食道裂孔ヘルニア10例を対象とした。生検は内視鏡を使用して施行した。一方Shayラットを使用し，食道炎を作成した後食道を剔出し，ヘキソサミン量を測定した。

ヘキソサミン量の測定には，Neuhausらの方法を応用した桶谷らの簡易比色定量法によった。

〈結果と考察〉

内視鏡検査で潰瘍や地図状ビランを認めるとX線検査ではニッシュェ，狭窄変形や辺縁不整が認められ，2つの検査所見はよく対応していた。内視鏡検査の線状びらん8例に対するX線像の現われかたは，縦走するバリウム斑として2例，粘膜の凹凸像が7例に認められた。

一方，対象としたびらん潰瘍型食道炎12例のうち9例は食道裂孔ヘルニアを合併していた。

びらん潰瘍型食道炎には内科的治療に抵抗する例が多かった。

ヒト食管粘膜のヘキソサミン量について，コントロール群では粘膜生検組織中のヘキソサミン量は，年齢や性別の有意差は認められなかった。食道炎を認めなくても食道裂孔ヘルニアを有する症例では粘膜ヘキソサミン量はコントロール群に比べ増加の傾にあり，食道炎の認められた例では，コントロール群に比べ統計的に有意差を認めた。

ラット実験食道炎群では，コントロール群に比べ有意に食管粘膜ヘキソサミン量は増加した。

ヒトの食道炎例の内科的治療による粘膜ヘキソサミン量の変化は，治療前よりも治療後の方が，びらん部，挿入粘膜共に減少した。

審 査 の 要 旨

逆流性食道炎は比較的遭遇することの多い疾患でありながら，その診断法および成因に関しては未だ不明確な部分が多い。本研究は丹念に臨床例を分析し，従来，内視鏡所見によってのみ診断され得るとされた本症のびらん潰瘍型病変も，注意深いレントゲン二重造影法によって診断し得ることを指摘した。

また成因論上，食道にも粘膜防禦機構が存在することを推定させる成績を示した点は意義が深いと考えられる。

よって，著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。